

かけすについてですが、私なりにいろいろ考えてみました。

以前歌った時は単に秋の澄み切った空をかけすが飛んでいて、のどかな感じで歌っていました。

しかし多田武彦氏が尾崎喜八の詩と出会っていきなり引き込まれたということを知り、何がそんなに多田氏を引き込んだのかを考えてみました。

前如歌った時は50代前半だったと思います。まだ若かったのですね。詩の持つ深い意味には気づかないでのんきに歌っていました。あれから20年以上経って、少しは物事も分かってきたのか、今回はそののどかさの裏に有る寂しさや無常観などを読み取れるようになりました。70歳を過ぎると毎年起こる事象をもう二度と見ることが出来ないのではないかと考えることもあります。その寂しさというかやるせなさというのかは年を取るほど募って来るものようです。

そのように詩を読むと無常観や寂寥感を読み取れるのではないのでしょうか。でも多田氏の曲は意外と明るく透明感があり、あまり寂しさや無常感などを感じさせず、それらを超越した、ただ実に秋だに集約させているのではないのでしょうか。

この組曲全体を集約させたような最終曲になっているのではないのでしょうか。以上1週間考えてみましたが、私としてはこの程度のことしか読み取れません。

山崎 豊